

を編みはじめた。

と、カラスが獲物を見つけたのだろう。何羽か群れて、さわぎはじめた。

「カアカア、カッカッカッ」

そのうち、

「アホ、アホ、アホッホッホ」

と、鳴くものもでてきて、神さまのあごひげによる三つ編みのスピードは、いっそう速くなった。

そばで見ていた、おともの幼な神さまは、こっそりつぶやいた。

「あーあ、あの三つ編みをほどくのは、だれの役目だ？」

そうして、神さまが、

「やはり、カラスを創造したのは、わたしのまちがいであったか」

と、自信なげにつぶやいたときには、ふとくて白い一本の三つ編みが、神さまの足もとに長々とのびていた。

*

「ふむふむ」

次の日も、神さまは、雲の上から下界を見おろしていた。

空はすみわたり、山々はもみじ色にかがやき、地上は黄金色に波うっている。

スズメは、チュンチュンとつつましやかに鳴き、尾の長

い鳥が十羽ばかり、空の青さを切りさいて飛ぶ。

「うつくしい。いつ見ても、うつくしい」

——青いような灰色のような、この鳥の羽の色を創りだすのに、わたしはすいぶん苦労した。名前もオナガと、いってシンプルに決めたが、さて、いかがなものか……。

神さまが満足の大笑をもらしたとき、オナガが、何かを見つけたようだ。

一羽のカラスだ。

十羽のオナガは鳴きさけび、いっせいにカラスにおそいかかった。

「ギエツ、ギエツ、ギエギエギエツ」

オナガの鳴き声を聞いた神さまは、うなだれた。

「なんと、センスのない声。品位に欠ける声。わたしの音楽的センスはなっていないようだ」

羽をむしられ、みるみる赤むけになっていくカラスから目をそらしながら、オナガの青いような灰色のような羽の色づかいさえも不吉に思えてくるのだった。

神さまは、無意識のうちに、白くて長いあごひげをせつと編んでいた。

「あーあ」

と、おともの幼な神さまは、こっそりため息をついた。

「神さまのきょうのストレスは、いちだんとはげしくていらっしやる。三つ編みが何本もできあがっているのだから。